

現代詩

色材しよくばい

泉

まいこ

オレンジ色のりぼん

おぐり あつこ

白色は月を含んだ百合の色

緑色は木の葉を揺らす風の色

黄色は夢に浮かんだ星の色

黒色は雨の名残の先の色

赤色は神楽を踊る少女色

藍色はどこかに隠れた過去の色

青色は渡せなかつた手紙色

橙色は君と過ごしたあの日色

水色は

喉につつかえたごめんなさい

公園の中を通りぬける
木々の枝に結んである

オレンジ色のりぼん

冬支度の目印は風に吹かれて
すっかり心をゆるしている

遠くからチェンソーの音

かき消すように芝生で椅子に座り

クラリネットを演奏するおじさん

音色が紡ぐ

あたたかくてやわらかな時間

シウルシウルと

ほどいてしまえば

何のあとに残らない場所を守るように

落とした枝は回収され

キンモクセイが香る

やさしい声

坂倉玲子

雨がやみ 日が差してきた
なんということもない
なんでもない 午後だけど
どこからか あのやさしい声が
聞こえてきそうで・・・

遠く過ぎてしまった あの頃の
あのやさしい声が
今も 聞こえてきそうで・・・

雨がやみ やわらかな日差しの中で
耳を澄ましている

あのやさしい声が
今も 聞こえてきそうで・・・

どこからか どうしても
聞こえてきそうで・・・
耳を澄ましている

好きな言葉

坂田真希子

静謐 微かに 月あかり
木漏れ日 煌めき 響きあう
希う 永遠 異邦人

光 たゆたう メタセコイア

出鱈目 離脱 シンメトリー

孤独 無秩序 シンクロニシティ

蹴散らす 安寧 片栗粉

ベゴニア へべれけ ガラパゴス

露骨 あけすけ けもの道

破壊 彷徨う 軽やかに

揺れる たわむ 茫漠たる

衝動 逸脱 穏やかに

いつまでも少年のようになりたい

佐藤裕一

いつまでも 少年のようになりたい

朝 目が覚めると 今日

何が待っているのかと 胸を高鳴らせ

ふとんを蹴飛ばして 跳ね起きた

あの頃のようにしたい

いつまでも 少年のようになりたい

道端で ガラスのビー玉を見つけても

ダイヤモンドの原石を 手に入れたように

目を輝かせて 喜んだ

あの頃のようにしたい

いつまでも 少年のようになりたい

たとえ 黒髪がほとんど消失しようと

左脚が麻痺のために 余り動かなかろうと

それでも それでも それでも

少年のようになりたい

詩

篠原貴子

灼熱の太陽を抱き

笑つて通り過ぎていった夏

そして今涼風をともない

足音をしのばせ 近づいて来た秋

何度も何度もおとずれては

去つて行く四季

うれしいことも悲しいことも

沢山あつたけど

めぐり来た喜寿の季節を大切に

楽しみながらゆつくりと

一度きりの人生だもの

私なりに輝いて

生きて行こうと思う

花とメッセージ

チズコ・W・ホエール

白い花が 咲いたよ 空に向かって

オーイ 元気かい 元気かい

赤い花が 咲いたよ 空に向かって

オーイ 幸せかい 幸せかい

黄色い花が 咲いたよ 空に向かって

オーイ 食べてるかい 食べてるかい

青い花が 咲いたよ 空に向かって

オーイ 頭使ってるかい 使ってるかい

紫色の花が 咲いたよ 空に向かって

オーイ 友達いるかい 友達いるかい

桃色の花が 咲いたよ 空に向かって

オーイ 生きてるかい 生きてるかい

生きねばね

行かねばね

中出 隆義

淋しいね

あの色はね

哀しいね

あの音はね

泣きたいね

泣けば済むのかね

生きねばね

何があつても

生きねばね

歳とつたね

知らないうちにね

君は若いね

何するのかね

笑おうか

戻れないからね

行かねばね

道がなくても

行かねばね

愛情

ひまわり

言葉でなくても

目に見えなくても

伝えられる 伝わってくる愛情もある

時に 音にのせて 風にのせて

伝え、伝わってくる

だから

その想いに敬意を払うと同時に

しつかり受け取り

そして伝えようと思う

いつも ありがとう

時なし花

村上 きょうこ

花の苗がにぎやかに店頭に並んだ四月

小さな黄色い花をつけている

丈夫そうなジャノメギクを買った

花壇の陽の当たる場所に植えると

あたたかい風が吹いてきた

花の苗にがんばってねと声をかけると

小さな花がOKと笑った

五月になると苗は横に広がり

たくさんの蕾が開いていった

夏の猛暑に負けず大きな株となり

ザルを伏せた形となった

晩秋にも咲いているジャノメギク

時なし花ねと声をかけるとOKと笑った

東の香

山
田
にしこ

樹皮のアロマを
油瓶でかぐ

風向きに逆らわない
きな臭さもない

天然にとっぷりつかるような
心地良さ

煙の香りと異なる

弧の描きさえ感じさせない

まるで陽の恵みを受けた
樹木が

ゆるやかに

からだをいやすよう
しみいる